

令和 5 年 6 月 15 日現在

機関番号：32689

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2020～2022

課題番号：20K00376

研究課題名（和文）宝巻の変遷史における明末清初の物語宝巻の流伝状況についての研究

研究課題名（英文）A study on the flow situation of Baojuan of the Late Ming Dynasty and the early Qing Dynasty in the history of the transition of Baojuan

研究代表者

辻 リン (TSUJI, RIN)

早稲田大学・法学学術院・准教授

研究者番号：80367151

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 1,500,000円

研究成果の概要（和文）：宝巻は明清から民国に至るまで民間で盛んに行われた語り物の一種である。因果応報を説くという宗教的な役割とそれに即した独自の形態を保ちながら、時代を経るにつれ、物語を含む叙事的なものが多くなり、宗教的なものから文学的なものへ傾き、娯楽性を強めていく流れがみられる。宝巻文学の変遷史において、明末清初から清の嘉慶までのおよそ百年間に、現存する宝巻のテキストが乏しいことから、踏み込んで研究されていなかった。本課題研究はこれまでの研究に続き、一連の考察によって、最終的には宝巻の変遷史において、いまだ明らかになっていない転換期の様相を解明することを目的とする。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究は、宝巻の変遷史の上で極めて重要でありながら、踏み込んで研究されていない「沈衰期」とされた期間の実態を明らかにするものである。「沈衰期」を挟む早期の宝巻を「古宝巻」、後期の質的な変化が見られる宝巻を「新宝巻」と呼ばれる。視点を変えれば、いわゆる「沈衰期」は宝巻の変遷史における重要な転換期と言ってもよいのである。この期間の実態を明らかにすることによって、宝巻文学の変遷史における主要な問題 民間教派による物語宝巻の伝播、俗曲の流行り廃りによる宝巻スタイルの変化過程、信仰対象の変化による物語の変容にまつわる問題の解明にもつながります。

研究成果の概要（英文）：Baojuan is a kind of narrative that was actively performed in the private sector from the Ming and Qing Dynasties to the Republic of China. While maintaining the religious role of preaching cause and effect and its own form corresponding to it, as time goes by, there are more epic things including stories, and there is a trend of leaning from religious to literary, and strengthening entertainment. In the history of the transition of Baojuan literature, it was not studied in step because the existing Baijuan texts were scarce for about 100 years from the end of the Ming Dynasty and the beginning of the Qing Dynasty to the Jiajing of the Qing Dynasty. Following the research so far, this subject research aims to elucidate the aspects of the transition period that have not yet been clarified in the history of the transition of Baojuan through a series of considerations.

研究分野：明清通俗文芸

キーワード：明清通俗文芸 語り物 説唱文学

1. 研究開始当初の背景

宝巻は語り物芸能の一種であり、多くは方言で語られているため、言語表現において一定の時代的地域的特徴を持つことは言を俟たないが、これ以外、例えば物語の内容や体裁、信仰対象などの面において、宝巻はどう変化してきたのかいまだ未解決の点が多い。これまで中国では各地で抄本の蒐集に力が注がれ、その地名を冠した宝巻（例えば、河西宝巻、酒泉宝巻、靖江宝巻など）を整理、出版されてきた。また近年、華北地域の宝巻や呉方言地域の宝巻など地域を限定し、文献と現地調査の両面での研究も進められてきた。例えば、陸永峰・車錫倫『靖江宝巻研究』（社会科学文献出版社、2008）、尚麗新・車錫倫『北方民間宝巻研究』（商務印書館、2015）などが挙げられる。しかし、宝巻の変遷史の視点から、特に明清時期の物語宝巻の様相とその変化についての、具体的検証はまだ十分になされていないのが現状である。その一因として、明末清初に現存する物語宝巻のテキストが不十分であることが挙げられる。

宝巻の変遷史における時代区分は澤田瑞穂「宝巻の変遷」（『増補 宝巻の研究』第三章「宝巻の変遷」、国書刊行会、1975）に詳しい論考がある。唐代佛教寺院の俗講を起源とする宝巻は、嘉慶10（1805）年を一応の画期として、古宝巻時代と新宝巻時代とに大別される。古宝巻時代は、明の正徳4（1509）年に羅祖が刊行した五部六冊以前の仏書に類する原初宝巻期、五部六冊とその影響を受けて刊行した「説理本意、一宗の経典としての宝巻」が盛行された17世紀末から18世紀初頭にかけての教派宝巻期、清の康熙30～40年（1700年前後）から嘉慶初期にかけての清朝政府の邪教取り締まりと宗教活動の隠密化による宝巻の「沈衰期」に細分される。宗教的・教派的な古宝巻時代から、明末清初から嘉慶までのおよそ百年間の「沈衰期」を経て、娯楽的な新宝巻の時代がきたというのが、従来の定説である。

本研究と深く関わるのは、教派宝巻の全盛期から清の嘉慶10年にかけての期間、いわゆる「沈衰期」である。「沈衰期」というのは、明末から清の嘉慶年間に至るまで、従来の教派宝巻のような形では、テキストが現れてこなくなったため、この時期は、宝巻全体の「沈衰期」と呼ばれる。これは単に出版やテキストの流布の視点から、古宝巻時代の刊行の隆盛に基づいたテキストの有無を枠組みにした考え方なのであろう。しかし、出版や文字テキスト有無の「沈衰」をもって、文学ジャンルそのものの沈衰とまでいっていいかどうか、ということに違和感を覚えた。この期間は教派宝巻という性質から、宗教史や中国哲学の面で研究が進められてきたが、俗文学の面では、現存する作品の数量に乏しく、従来顧みられてこなかった。しかし、古宝巻と新宝巻の間のおよそ百年間に、宝巻がどのように享受され、継承され、かような質的な変化を生んだのか、という問題は宝巻の受容、変遷を考えるうえで、看過できないものと考えられる。

2. 研究の目的

本研究は、これまでの研究に続き、一連の考察によって、最終的には宝巻の変遷史において、いまだ明らかになっていない転換期の様相を解明することを目的とする。

3. 研究の方法

本研究は宝巻史全体の流れをうまく繋ぐために、まず深く追求されなかった女性文化を手がかりに、宝巻の担い手、受容地域、地域文化的な変遷を考察し成果を発表した。次いで、民間教派による物語宝巻の伝播、俗曲の流行り廃りによる宝巻スタイルの変化過程、信仰対象の変化による物語の変容にまつわる問題は、宗教教派期と宝巻の「沈衰期」とされる時期において、いまだ十分に解明するには至っていなかった問題である。これらの問題をより明らかにするには、今後、同時期の宝巻テキストを蒐集し、その変容過程も具体的に検証する必要があると考える。

具体的には次の方法で進める。(1) 宝巻作品をよりの確に解説、考証するため、基礎作業として国内外に散在するテキストの蒐集・現地調査と比較分析を行う。(2) 国内外の研究會・学会に参加し、最新の研究情報を収集すると同時に、研究成果の発表も積極的に行う。

(3) 最終的には、個別論文の執筆に加え、調査成果をまとめた報告書、考証・解説を付け

加えた校注本の刊行をめざす。またこれら蒐集・購入してきた資料を整理・データベース化し、広く今後の研究に提供する。

4. 研究成果

研究者の専門分野は明清時代の通俗文芸、即ち、明清小説・演劇と、それらの基底としてより古い歴史を有する語り物芸能である。具体的な研究ビジョンは、従来ばらばらに研究されてきたこの三者を、統一的な視点から捉え、相互の有機的な繋がりと演変の過程を解明していこうとするものである。この研究補助期間の3カ年（2020-2022年度）では、宝巻文学の変遷において、従来、顧みられてこなかった明末清初の宝巻の流布、受容状況の一側面も明らかにした。その段階的研究に関連する主な研究成果は以下の通りである。

2020年度では、これまでの研究を踏まえて、かかる明末清初の現存の宝巻のテキストを解読し、その近隣の通俗文芸（明清の伝奇、語り物、少数民族の長編叙事歌など）との関わりにも着目して研究を進めた。主な成果として、論文『何文秀物語の流傳について』

（『中国文学研究』第46期、2020）を発表した。2021年度では前年度に続き、かかる明末清初の現存の宝巻のテキストを解読し、欧米の主要図書館に所蔵する関連資料にも着目して研究を進めた。主な成果として、「哈佛大学燕京図書館所蔵宝巻考辨」（北京大学中国古文献研究中心主催「中日漢籍研究学術研討会」オンライン国際シンポジウム、2021.12）で発表した。2022年度では本課題研究の段階的成果として、宝巻にみる俗曲と江戸時代の日本に伝わる清楽の比較分析を行い、その流伝と変化の一側面を考察した。また口承文芸と宝巻の流布の関わりに着目して考察を行い、研究を進めた。主な成果として、論文「口承文芸としての宣卷と明末清初の宝巻」（『人文論集』（61）, 41-63, 2023年2月）国際学会「宝巻的俗曲和清楽」（早稲田大学古籍文化研究所主催“中日漢籍研究与交流学術研討会”、オンライン国際シンポジウム、2022年12月）を発表した。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計2件（うち査読付論文 1件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 辻リン	4. 巻 61
2. 論文標題 口承文芸としての宣卷と明末清初の宝卷	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 人文論集	6. 最初と最後の頁 41-63
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 辻リン	4. 巻 46
2. 論文標題 何文秀物語の流傳について	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 中国文学研究	6. 最初と最後の頁 80-99
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計2件（うち招待講演 0件/うち国際学会 2件）

1. 発表者名 辻リン
2. 発表標題 「哈佛大学燕京図書館所蔵宝卷考辨」
3. 学会等名 北京大学中国古文献研究中心主催「中日漢籍研究學術研討会」(オンラインシンポジウム)(国際学会)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 辻リン
2. 発表標題 「宝卷的俗曲和清楽」
3. 学会等名 早稲田大学古籍文化研究所主催「中日漢籍研究と交流學術研討会」(オンラインシンポジウム)(国際学会)
4. 発表年 2022年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------